

「処女喪失まで」

作・田村昇

第一章

ケンイチの住むアパートはマコトの家と学校を挟んで反対に有る。だから帰りが遅くなってしまふのは仕方がない。マコトにはそれだけの理由があった。

ケンイチのアパートは他に住人が居ない。昔は石切場の作業員が暮らしていたが、安い粘土のツボと石のブロックに砕いた死人を入れるなどナンセンス、そんな流行から石屋は半分もなくなった。今や「悪習」に囚われた文字通りの亡霊しか客は居ない。

マコトにはそれが好都合だったのだ。周りの人間と言えば、足の悪い老婆とそれを介護するニート。寂れた彫刻美術館の管理人、そして今しがたトイレから帰ってきたケンイチだけだからだ。

マコトはお題目でしかない勉強ノートを閉じケンイチのベットに腰掛けまず靴下を脱いだ。ケンイチはいちいちいつも言うセリフを投げかけてきた。

「まだ早いって」

「準備はしてきたんでしょ？」

ケンイチは後ろに手を回し自分の尻を握った。男はこうでなくっちゃとワックスで尖らした髪、近所のテニスコートで焼いた肌、同じくテニスで引き締めた体。凜々しくも大き

く前を見る目の下を赤らめ肩を上げながら言う。

「まあ……」

蔓はアパートの壁面では飽き足らず日が差す部分全部を覆いケンイチの健康的な部屋を暗くしている。本棚も床に直接置かれたちゃぶ台も前の主が何らかの目的で付けた不用意な出っ張りに吊るされたユニフォームもそしてケンイチも。マコトはベルトを外しジーパンを床に捨て、青地にフクロウの模様があるトランクスを脱ぎこちらは丁寧にベッドの上に置いた。自分がどれだけ扇情的に見えているか、それを想像するだけでマコトは楽しかった。ただ、大概、想像は一瞬。再びベッドに腰を下ろすとケンイチはもうこちらの股間に寄り添い吐息を吹きかけて想像が現実であることを表してくるからだ。

「いいよ」

ケンイチは言われるまで口をつけない。言われてもゆっくり、ごくゆっくりとマコトに唇を付ける。その唇で皮を剥くにはもう慣れたようだ。マコトの敏感な部分を露わにしながら同時に口の中へ隠していく。マコトは震えた。舌先が触れる瞬間。コレが好きなのだ。よく出来たとケンイチの頭を撫でてやる。ケンイチはそれを活力に舌先を絡めてくる。ケンイチの手はマコトの、ケンイチのそれとは違って締まりのない太ももを、痛いほど握っている。熱が入ってきた。ケンイチはマコトの陰毛に鼻をくすぐられながらイチモツを啞え込む。運動していると喉も鍛えられるのだろうか？ケンイチは苦もなくそれをやり遂げる。丹念に舌が這わされる感触。熱い口。そしてそろそろと引き抜かれ冷たい部屋にさらされる自分。先端をほじくるように舐めてくるケンイチ。また、頭を撫でてやる。ケンイチは上目遣いで見返してくる。どれも良い。至福の時だ。

しかしもっと良い時もある。世界は広い。幸せとはこんなものではない。

マコトはそのままケンイチをチンコから引き離し手招きした。ケンイチはその意味を知っている。薄く、模様のない白いシャツを脱ぎ短パンとブリーフを同時に下ろした。現れたケンイチの股間はこの前剃ってやった陰毛がほんの少し伸び始めている。そこから立ち上がり汁を垂らす棒。その下では玉袋がゆっくりとうねっている。

「どーぞ」

マコトは自分のトランクスをケンイチに差し出す。ケンイチはそれを受け取るとベットの上へマコトに尻を突き出し、顔はシートとトランクスの上において息を吸い上げる。匂いがないと落ち着かないんだそう。マコトは最初笑ったが、その裏では愛おしさが増していた。なんて可愛いんだろう。そして可愛い尻は今こちらに向かい、肺から血管へ送られた自分の微粒子が巡って来ているはずだ。いや、流石にそれはないかな？そうとも思ったが今のマコトには関係ない疑問だった。トイレで自分のために綺麗にされた穴が一つこ

ちらへ向いているのだ。お尻の肉に手を付けその穴へ舌を這わせる。尻が揺れる。もう一度這わせる。次は逆に跳ねる。もう一度、もう一回。止まらないでいるといつしかお尻は回転しこちらを振り回さんばかりだ。その回転に合わせて舌をねじ込んでいく。手は肉を左右に開き入り口をより大きく見えるようにする。ケンイチの大きな息が聞こえる。ご自慢の肺活量で僕を呼吸している。舌は柔らかいヒダを捉える。よく用意してあるいい子の穴。ケンイチはマコトと付き合いだして三ヶ月、他のどの彼氏に教えられるよりも早く、素晴らしく成長した。実はマコトの初「彼女」だとはつゆ知らず、マコトを愛の盲目のままに受け入れた。

いい子にはご褒美を上げなくちゃ。

マコトは自分の肉棒を未だ回転止めケンイチにあてがった。そのまま少しだけ前へ。ケンイチの腰が勝手にマコトを中へと導く。包まれる感触に身を任せながらもマコトは次へ向かって高ぶる。全部飲み込まれると同時に今度は無慈悲に引き抜いてやる。ケンイチは離れたくない一心でついてくる。そこで思いっきり入ってやる。カウンターヒット。ケンイチがパンツを啜え艶声を我慢する。もう、これでケンイチは僕のものだ。マコトはどんだん突いてやる。この支配からは逃れられない。ケンイチはカウパーを駄々流し、溢れる声を我慢できずマコトのトランクスに唾液と一緒に吐き出す。

汗が飛ぶ。全力で中をほじくってやる。コレこそが求める時間なのだ。

先端が破裂しそうだ。ケンイチはいつもの癖で「もう！もう！」とパンツ越しにも判る主張をする。

「いいよ！イクよ！」

チンコにヌメる腸に震える。同時にきつく閉まる尻。引き締まった筋肉が自分を導く。

この時ばかりはマコトもケンイチも平等だ。

二人は絶頂した。

自分の精液と尻から溢れるマコトの精液染み込むベッドに溺れるケンイチをそのままに、黄色い縞模様のブリーフを勝手に拝借したマコトはカバンに見てくれだけのノートを押し込むと玄関を開けた。

「パンツ洗っというてね」

ケンイチはもう一度ソレの匂いを嗅ぐと薄く笑い目をつぶった。外は暗くなっていた。家に帰るのが遅くなる理由をそのままにマコトは帰路についた。



ケンイチのアパートを出ると、もとはこれも石工が住んでいたマンション、を潰しシーソーだけがある公園。夏は虫の巣穴になり鳴き声がかましい石垣と潰れた石屋に挟まれた坂道、その先にはケンイチが通うテニスコートそしてまた潰れた石屋、打ち捨てられた石。潰れた石屋。学校を越えるまではずっとこうだ。例外なのは今から差し掛かるうとしているガソリンスタンド。ただし石がないだけで潰れてはいる。石を運ぶトラックがなくなったからだろう。車があればケンイチを山の上のボロいホテルに連れ込んでやるのに。ああいったところで監禁プレイってすごい気分でそうだ。

「はい……こうですか？」

まさか肯定されるとは思わなかった。どこから？誰が？口には出してない。そんなに

「監禁プレイってすごい」って顔してただろうか？そもそも街灯すら少なくなったここで見えるのか？オリオン座は明るいけど（マコトはオリオン座以外見分けがつかなかった）

「ふっふん……ああ……」

先の声。女性、女の子のように聞こえる。今度は肯定してくれない。代わりに大げさなエロビデオを思い出させた。ケンイチは天然で出す声だ。

「ふっふん……ふん……」

どこから聞こえるか判った。そもそも石の影以外は潰れたガソリンスタンドしかないのだ。トラ模様のロープで隔離したつもりになっているソレには多くの粗大ごみが捨てられている。もとは白かったであろう建物はサビだらけ。コンクリの隙間からは雑草だらけ。

「んあん、すうっ、いっ」

マコトが虎色のロープを越えたのはなんてことはない。好奇心。解りやすく性欲。恋人は体力のわりにすぐへばってしまうのが玉に傷だ。再び勃ってきた欲望のちよつとでも足しになればと足を踏み入れた。

声はもともとカウンターだったリガムの自販機があったりしたであろう建物内から聞こえる。割れかけたコンクリが鳴かないようわざと草を踏みしめ大股に近づく。声以外にも聞こえてくる。尻に打ち付ける音。外から聞くとこんななのか。意外と低い音だ。女の艶はその間にも増してくる。正直、マコトは女でもよかった。いや、図書室の君とか言われてケンイチに告白されるまで、もっと正確に言うとは半分無理やり舐められるまでは女でよかった。得な性分だ。これから喘ぐ女と突く男で楽しむのだ。

注意に注意して覗いたマコトの期待は裏切られた。一つは男に。いかにも汗むさい、太った、流れ込む街灯の光だけで判る禿頭。いわゆるおっさんだったのだ。腹の肉で隠れた股間を飛び散る汗と一緒にニタニタ顔で打ち突けている。もう一つは打ち付けられる先。

女に、いや、こちらも「男」にあった。

「んっあっんっふっふえっ」

メガネを掛けたシヨートの癖っ毛、舌をだしてよだれを垂らし夜だと言うのに判るほど顔は高揚している。おっさんからの欲情に合わせて声を上げ尻を揺らす。そしてその下にはカウパー垂らすモノが揺れている。細くて華奢。運動などしてないマコトにも劣る体つきと手をついた壁から見ると低すぎる背丈。そんな男の子が女のような声で大きく重いおっさんを受け止めている。

「いいですっ……すっいいっ」

「せやろ、せやろ？」

男の子は顔を上げ目を開いた。大きな光る眼。喜んでいる顔だ。

ずりゅっ

マコトのモノが大きく立ち上がりブリーフの中をずれ動く。それをジーンパン越しに握る。

「ほーらあ、これはどーや？」

「んんっ！」

おっさんは身をかがめると男の子の背中に自分の肉を乗せながら汗を塗りつける。そのまま耳を噛んだ。そして同時に男の子の、体に似合った小さいものを握り込む。

「ああっ、だめっ！」

おっさんの指が前後する。暗がりでもハッキリ判る。一つ一つの指が握ったり離したり。男の子のチンコはソレに合わせて凸凹と波打つ。マコトは自分のものもそれに合わせて擦る。けど、何故だろう。なにか足りない。

「出る！出ちゃっ！」

「ええで！たっぷり出しゃー！」

おっさんの突きは容赦ない。男の子が折れてしまいそうだ。けどあれだけ気持ちよく死ねたら幸せかもしれない。

「んっ！」

男の子は生きる喜びと射精の喜びで震えた。おっさんに背中だけでくっつき射精する。おっさんの手で絞られるように、いや、逆だ。せき止められていたんだ。長く少しづつ続く放出に男の子はまだ震える。マコトはまだ自分で擦る。やがて、ゆっくりと、ゆっくりと壁を伝い落ち男の子は汚れた床に這った。おっさんのチンコが抜け、少しの光に光る芸術がそこに有る。マコトは性器を握りしめた。

「よう、ぼっず」

おっさんが目の前に。まだチンコを握り興奮冷めやらない自分の前に全裸のおっさんが

居る。汗の匂いがする。握る手に何故か力が入る。

「おっちゃん、夜にはだいたいおるから」

その手が、分厚くて毛がゴウゴウと生えてる手がマコトの手の上から。性器を握ってき
た。「今僕はチンコ握られてる」

マコトはソレを目視で確認する。おっさんの手がさっきの男の子にしたようにゆらゆら
と、尺をとるように動く。

「ううあー！」

マコトは射精させられた。それと同時に顔に何かが付く感触がした。熱いソレは目を塞
ぎ口に入り少しずつ流れているようだ。

「またな」

裸の中年は奥の間に消えた。残されたのはまだ肩で息する女の子のような男の子と、お
っさんに射精させられ顔射され、その精液を喉に流しながら射精が収まらない男の子だっ
た。ケンイチのパンツはその恋人以外の気持ちで濡れている。